

## エッセイ 台湾研究を始めるということ

### 私の台湾研究事始めの頃

若林 正文

#### 「台湾」にスイッチが入った頃

自身の「無知」を知るのが学問の始めだとするなら、私の台湾研究もそうだった。学部生の頃故戴國輝先生から台湾の作家呉濁流の自伝的作品『アジアの孤児』を紹介されて読んで衝撃を受けた。衝撃はその内容よりは、「台湾」について「無知」へに気づいたことのほうが大きかった。卒業論文を考え始める時期だったこともあり、急に眼に映る文字の中で「台湾」の二文字に過敏となった。1960年代末は新聞にも「台湾」の二文字は滅多に出ない時代だった。「台所」という文字にまで反応している自分に何回も苦笑いした。「台湾」への関心にスイッチが入ってしまったのだった。

#### 「大陸反攻」の勧めがあった頃

卒論では、1920年代中頃の台湾文化協会「左右分裂」を背景に展開した「中国改造論争」をトピックにし、修士論文では植民地期の台湾共産党を取り上げた。その後、博士課程では何に組み組んだらよいか、迷いに迷って一時自律神経失調症になってしまった。

その頃だったと思う、ゼミの帰りに同道していた大学院の先輩に「何時“大陸反攻”する（中国研究に乗り換える）つもりか」と尋ねられた。まだ海のものとも山のものともつかぬ分野に手を付けてしまった後輩の前途を気づかっただけの言である。そう問われて特にショックを受けたわけではない。ただ、聞いてなるほどそう考えるのが世間の相場というものかと今更ながらに感じて、長く記憶に残っている。

#### 台湾議会設置請願運動の研究から現代台湾政治研究へ

その後、台湾議会設置請願がどのように扱われているかを調べてみようと思い立ち、国会図書館に通って帝国議会の請願関係の議事録をチェックし、「帝国議会における台湾議会設置請願」に焦点を当てて、この台湾人の民権運動に関して少し長い論文を書いた。資料読みの合間、当時国会図書館立法調査局にいた春山明哲氏と昼休みに食堂で待ち合わせていろいろ議論したのは楽しい時間だった。

この論文を完成すると、1920年代の台湾政治社会運動を左から右までいちおう検討したことになるので、今から見ると実に緩いやり方だったが、何とかまとまりをつけて、研文出版から『台湾抗日運動史研究』として出していただき、それで博士号を申請した。いきなりお願いしたにもかかわらず主査として事柄をさばっていただいた平野健一郎先生には感謝の言葉も無い。

1970年代末に近づくと、中壢事件、美麗島事件などの政治事件の発生が報じられ、それまで同時代台湾の動向にはあまり目がいっていなかった私などにも「党外」といった言葉も入ってくるようになり、博士論文に向かう研究を行いながらも、動きが出てきた同時代の台湾政治も気になり始めた。香港の『七十年代』誌などの台湾関係記事をあさるようになり、終には台湾の「選挙見物」に足を運ぶようになり、そして、何年かの過渡期を経て、現代政治研究に軸足を置くようになった。とはいっても、政治学なるものをきちんと勉強したこともなく、全くの無手勝流の研究活動だった。それでも何とかやれたのは、まさにその時勢というものに際会した運の良さであつたらう。台湾の変化が私の研究を引っ張ってくれたのであつた。

### 「今度はわれわれが伊能を踏査するのだ」

振り返れば、結局「大陸反攻」はしなかった。何故かと今から振り返れば、これもまた「無知の気づき」という知的真空の吸引力が強かったからと云うほかないのかもしれない。植民地下の抵抗運動史研究は、史料を把握すれば後は学生時代に読みかじり聞きかじったタームの延長で何とかなった。しかし、「党外」をその台頭をめぐる事象はほとんど未知の領域で、政治的展開の節目節目で、政治学その他のディシプリンからタームを勝手に借りてきて何とかするということの連続だった。それも2008年までフォローするのが限界だった。以後数年不調が続いた。人呼んで、“post-book depression”。無手勝流の研究活動が突き当たる当然の袋小路ではあろう。

今(2018)年春、台湾大学図書館ホールで開催されていた「重返田野——伊能嘉矩與台湾文化再發現」の展示を見た。その末尾に、展示設計者の陳偉智氏の「かつては伊能(嘉矩)が台湾を踏査した。今日われわれが伊能を踏査するのだ」という言葉があつた。実は、この二、三年は、政治研究に軸足を置いていた30年間サボっていた台湾歴史研究の先行研究を「悪性補習」している。しかし、陳偉智氏のように云われてしまうと、伊能のような「帝国の学知」から、今日の、例えば自分も含めた日本台湾学会諸会員の研究が生み出す「学知」まで、日本における台湾学知の積み重なりについて、メタ・レベルのことも考えていかないと、「悪性補習」も実り少ないものになってしまうかも知れないという気もする。

ただ、これもまた私が研究活動の上で出会ってきた、私にとっては目新しい「無知」という知的真空の一つであるのかもしれない。そんなことはもはやお前がやることではない、できることでもない、との声も聞こえてくるが、再度その吸引力に身を委ねるのも悪くないかもしれない。

### 呉濁流先生から送られた詩

最後に、院生時代に呉濁流先生から送られた詩を記しておく。呉先生には訪日時に戴國輝先生に引き合わせていただき、1973年初めての訪台時に河原功さんに台北新生南路のご自宅に連れていってもらった。奥様を亡くされたばかりとのことで河原さんが花を用意してきた。詩は、その翌年先生から送られたものである。

神州板蕩幾多年 又在東京會後賢 常伴美人休笑我 放懷天地聳吟肩

莫笑多情好伴花 人生何事足堪誇 壯懷自傲詩和酒 放浪形骸到處家  
若林先生雅正 甲寅春遊日有感 七十五叟 吳濁流

私に漢詩の解釈力は無いのだが、後半四行からは、呉先生のはにかみと誇りとが同時に伝わってくる感じがする。毎年眺めているうちにこの四行が好きになった。呉先生は1976年永眠された。

(2018年5月30日相模原にて)